

「こ」の先の僕らは

律..主人公。背が低い。心優しき常識人。宗明とは保育園からの幼馴染。

宗明..口調が荒い。めんどくさがりだが世話焼きな一面もある。冬希に振り回されている。

透夏..冬希の兄。生徒会に所属している。成績優秀で人望も厚く、なんでもそつなくこなす。冬希..透夏の妹。一つ下の学年で、成績優秀。どこか抜けていてほわっとした雰囲気だが、己の信念は曲げない我儘プリンセス。

宗明「…よお。」

透夏「ちゃんと来たんだね。えらいじゃないか。」

宗明「こんだけしつこく連絡されたら誰だって来るだろ。どうにかしやがれ。」

透夏「ははは、俺の手には負えないよ。さ、あがつて。」

SE..玄関ドア閉める音

SE..ビニール袋の音

宗明「これ、お袋が持つて行けって。」

透夏「お気遣いどうも。あとで頂くよ。…浴衣3着あるけど、どれがいい?」

宗明「なんでこんなにあるんだよ。」

透夏「毎年母さんが買つてくるんだ。中三からほとんど身長伸びてないのでね。」

宗明「ほーん…どれでもいいから、適当に着せてくれ。」

透夏「俺の趣味でいいってことかな?それとも似合うやつ?」

宗明「なんでも…いや、まあ、無難に似合うやつでいい。」

透夏「了解。脱いだ服はこれに入れて。」

宗明「おー。」

透夏「…髪はどうする?希望があれば聞くよ。」

宗明「別にこのままでいいだろ。」

透夏「たまにはお洒落しなよ。もつたいないだろ。」

宗明「めんどくせえ。やるなら勝手にやれ。」

透夏「はいはい。」

SE：衣擦れの音

透夏 「できた。そこの椅子座つて。」

宗明 「おー。」

透夏 「…なんだか、昔を思い出すな。」

宗明 「あ？」

透夏 「みんなで海に行つた帰り、冬希のついでに全員ドライヤーをかけてやつたことがあつただろう。」

宗明 「覚えてねえよ。そんな前のこと。」

透夏 「お前、最後まで嫌がつてたんだぞ？ 僕は風邪ひかないからいいんだって。風呂嫌いの犬みたいだつたよ。」

宗明 「るせえな。今は大人しくしてんだからいいだろ。」

透夏 「ははは。確かに。…大きくなつたね、宗。」

宗明 「は？ キシヨ。お袋かよ。」

透夏 「前向け馬鹿。まだ終わつてない。」

宗明 「痛っ！ 首もげるだろうが！」

透夏 「ははははっ。」

SE：玄関チャイム

SE：玄関ドア開ける音

律 「遅くなつてごめん！ 結構待つたよね。」

透夏 「大丈夫。俺達もさつき終わつたところだよ。冬希は？」

律 「最終調整中。お母さんがこだわり出しちやつてさ。」

透夏 「はは。冬希はおばさんのお気に入りだからね。」

律 「ほんとごめんね…あれ、宗明！ 髮形がいつもと違う。」

宗明 「こいつにやられた。」

律 「かつこいいよ！ 浴衣もすゞく似合つてる！ 冬希が見たら喜ぶんじゃないかな。」

宗明 「…そうちかよ。」

透夏 「律も似合つてるよ、俺のおさがり。」

律 「ぐつ…嬉しいけどなんか複雑だなあ。僕も二人みたいに、すらつとかつこよく着こなしたかつたよ。」

宗明 「ちっこいのも個性だろ。気にすんな。」

律 「気にするよ！というか、気にしてるんだから言わないで！」

透夏 「律はそのまでいいんだよ。あ、ヘアピンつける？もつとかわ…魅力的になると

思うよ。」

律 「知らないよ！一人して面白がってるでしょ！」

冬希 「あれえ？りつちゃんいじめてるの、だうれだ？」

宗明 「！」

律 「冬希！終わったの？」

冬希 「うん。おばさんがすぐ頑張ってくれたの。どう？」

透夏 「よく似合ってるよ。なあ、宗……」

宗明 「……可愛いんじやねーの。そら、行くぞ。」

冬希 「やつた！花火楽しみだねえ。」

宗明 「引っ付くな！どうせお前はメシのことしか考えてねえだろ。」

冬希 「そんなことないよ？やきそば食べて、輪投げして、から揚げ食べて、ラムネ飲んで、それからあ…」

透夏 「……。」

律 「…透夏？どうしたの。」

透夏 「あ、いいや、なんでもないよ。…行こうか。」

SE：歩き去る音

BGM：がやがや

律 「わあ、結構人いるね。先に場所取りしたほうがいいかな？」

透夏 「そうだね。屋台もそんなに遠くないし、このあたりにしようか。」

律 「じゃあシート敷くね。あ、重りしないと飛んで行っちゃうかな。」

透夏 「俺見てるよ。ついでに荷物おいていく？」

律 「え…。」

冬希 「お兄ちゃん行かないの？」

透夏 「ああ、おつかい頼めるかな。」

冬希 「いいけど、なんで？お兄ちゃん一人になっちゃうよ？」

透夏 「気にしなくていいから。楽しんでおいで。」

冬希 「でも…」

宗明 「…行くぞ。腹減った。」

冬希 「しゅーちゃん！」

律 「あ…買つたらすぐ戻るから！待つててね、透夏！」

透夏 「ゆつくりでいいよ。気をつけて。」

透夏 「……はあ。」

律 「（透夏の様子がおかしい気がする。きっと、まだ悩んでるんだ。せめて気分転換ができるといいんだけど…）」「

律 「…やっぱり僕、戻ろうかな。」

冬希 「え？」

律 「ほら、二人ずつ行けば寂しくないし、お祭りも楽しめるかなーなんて。」

宗明 「…。」

冬希 「りつちゃん…じゃあ、そこのから揚げ買っていつてあげて？ある程度見て回つたら戻つて来るねえ。」

律 「うん。楽しんできてね！」

宗明 「……いつちょ前に氣い遣つてんじやねえよ。くそつ。」

冬希 「やつぱりそう、なのかなあ。」

宗明 「…おら、さつきとやりたいことやつて戻るぞ。どこ行く。」

冬希 「…うん！まずはあそこの…」

透夏 「（俺は結局、何がしたいんだろう。勝手に傷ついて、嫉妬して、逃げて。挙句みんなに氣を遣わせている。）」

透夏 「…いつからこうなつたんだか。」

透夏 「（冬希の小学校入学に合わせて引っ越しをした。隣の家へあいさつに行くと、ちようど同じ年の律がいた。律は俺たちを気遣つて、よく遊びに誘つてくれた。そこで出会つたのが——宗明だった。律の幼馴染。口調こそ荒いけれど、友達想いで、俺にはない自由さを持つたやつ。俺たちはすぐに仲良くなつて…小・中と長い時間を共に過ごしたんだ。）」

(宗明 「進路希望調査？あー。あつたなそんなの。」)

(透夏 「先生には進学校に行けって言われたんだけど…少し、悩んでいるんだ。」)

(宗明 「そんなもん、行きたいところ書きやいいだろ。先生はお前の人生保証してくれ

ねえぞ。」)

(透夏 「……そう、だね。はは。確かにそうだ。……宗はどうにするか決めた?」)

(宗明 「さあな。特にやりたいことねえし、律と同じところでいいんじやねーの。

近えし。」)

(透夏 「ふーん。そうか。」)

(宗明 「……キショ。なににやけてんだ。」)

(透夏 「別に。なんでもないよ。」)

透夏 「(気づいたときにはもう、好きだった。この先もずっと、そばにいられればそれでいいと思っていたはずなのに。)」

透夏 「(……髪、昔より硬くなつてたな。)」

透夏 「はあ……気持ち悪。」

律 「透夏。」

透夏 「!り、律。どうしたの。」

律 「から揚げ買つてきたんだけど……もしかして、体調悪い?」

透夏 「いや、大丈夫。ありがとう。」

律 「無理しなくていいからね。いただきます。」

透夏 「いただきます。」

律 「……。」

透夏 「……。」

律 「……透夏。」

透夏 「なに?」

律 「この前空き教室で話したとき、自分が変われば周りも…って言つたよね。」

透夏 「ああ、うん。実はまだ…」

律 「ごめん!」

透夏 「……え?」

律 「僕、考えが足りてなかつた。そのままの透夏でいいはずなのに、変われなんて…それつて、今の透夏を否定してると一緒だよ。」

透夏 「そんな、律が気にすることじやないんだ。これは俺の問題で…煮え切らないのは事実だし、律のアドバイスは間違つてないんだよ。」

律 「そもそもしても、僕は透夏を傷つけた。だから、ごめん。」

透夏 「律……頭、あげて。俺は大丈夫だから。」

律 「……うん。」

透夏 「少しだけ、聞いてもらつてもいいかな。あまり面白い話ではないんだけど。」

律 「聞く。聞かせてよ。」

透夏 「…俺、好きな人がいるんだ。そいつは俺のことを友達だと思っていて…俺も、そいつのそばに居られるなら、友達のままでいいと思ってた。」

律 「うん。」

透夏 「だから、そいつに好きな人や恋人ができるても、幸せを願おう、応援しようつて思つてたんだ。でも…」

律 「…。」

透夏 「…見て、いられなかつた。どうして俺じやだめなんだ、俺ならこうするのに、つて…でも、だめだ。敵わない。だつて俺には…あんな表情、引き出せないから。」

律 「透夏…。」

透夏 「なのに…諦められなくて……つ好きで、どうしようもなくて……もう、わからないんだ。」

律 「…辛いんだね。」

透夏 「…。」

律 「透夏は、諦めたい？その人のこと。」

透夏 「…好きでいたい。でも、こんなに苦しいのはもう、御免だ。」

律 「そつか。その人に、自分の気持ちを伝えたいって思つたりする？」

透夏 「こんな感情…気持ち悪いだろう。重いし、きっと距離を置かれる。」

律 「そうかな。その人の考えはわからないから、ただの想像になつちやうけど…自分を好きでいてくれる人つて、結構貴重な存在、だと思うんだよね。ずっと想い続けるつてなかなかできることじやないし、気持ちを押し付けずに相手を尊重するのつて、すごく難しいことだと思う。それを知つていれば、透夏が想いを伝えたとしても、気持ち悪いだなんて思はないんじやないかな。」

透夏 「…でも、負担になる。知らなければ余計なことを考える必要もないだろう。」

律 「余計かどうかはその人が決める事だよ。それに、伝えなかつたら透夏の想いに向き合うこともできない。…透夏は隠すのが上手いから、きっと言われるまで気づけないんじやないかな。」

透夏 「…。」

律 「…なーんて、言えた口じやないんだけどね。あはは。…僕もさ、日頃思つても言えない事とかあるから、少しあかるよ。伝えるつて勇気がいるし、間違えたら傷つけちゃうこともあるでしょ。だから怖くて。その点、ストレートにものが言える宗明たちは本当にすごいよ。尊敬する。」

透夏 「…そうだね。」

律 「あ、一人で喋りすぎた…話聞くはずだったのに、ごめん！」

透夏 「いや、いいんだ。なんだか少し、すつきりしたよ。ありがとう。」

律 「そう…？そつか。それならよかつた。」

透夏 「から揚げ、冷めても美味しいね。」

律 「これも食べる？甘辛ソース味。」

透夏 「ありがとう。俺のも食べていよい。」

律 「うん、ありがとう。」

冬希 「二人とも〜！ただいま。」

律 「おかえり。わあ、大漁だね。」

冬希 「みんなで食べようと思って〜。お兄ちゃんどれがいい？」

透夏 「ああ。焼きそば、貰おうかな。」

冬希 「はあいどうぞ。りつちやんは？」

律 「うーん、どれにしようかな…」

宗明 「…透夏。」

透夏 「ん、どうした。」

宗明 「悪かったな。氣い遣わせて。」

透夏 「…何の話かな？」

宗明 「気にしてねえならそれでいい。それなりに楽しめたから、その…感謝してる。

そんだけだ。」

透夏 「……宗。俺も――」

宗明 「あ？」

透夏 「俺も、お前に伝えておきたいことがあるんだ。あとで時間もらつてもいいかな。」

宗明 「…わかった。話すときNINEくれ。」

透夏 「ああ、ありがとう。」

BGM：花火

律 「わ、始まつた！」

冬希 「綺麗：来てよかつたねえ。」

宗明 「ふん。」

透夏 「…写真、撮ろうか。花火を背景にしてさ。」

律 「いいね！冬希撮つてよ。」

冬希 「ふふん。インカメはお任せあれだよお。みんな集まつて〜。」

宗明 「暑い。くつづくな。」

透夏 「結構寄らないと入らないんだよ。ほら詰めて。」

律 「宗明見切てるよ。ほら、」
「ち。」

宗明 「くそっ。」

冬希 「撮るよお？ はあい、ちーす！」

SE：写真撮る音

BGM：遠のく